「過労自殺」する若者

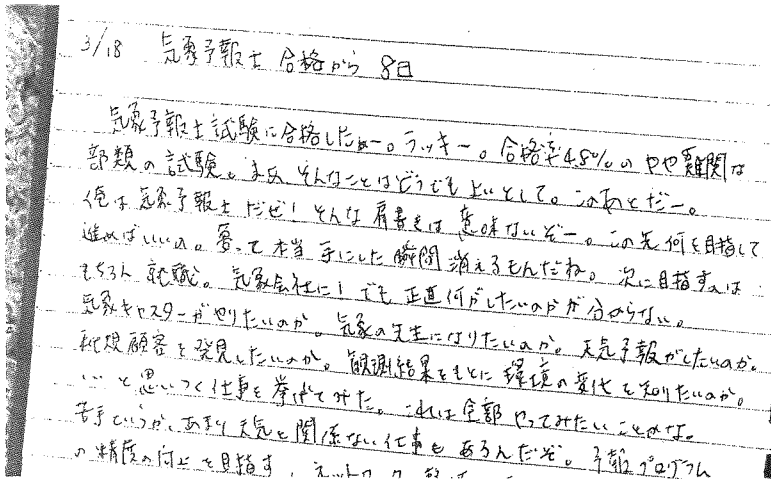
倍増した20代の労災申請

ストーリー

今回の S の取材は

蒲松丈二（東京夕刊編集部）

91年入社、北京、バンコクなど海外勤務10年。昨年4月に東京に戻り、長編ルポを主に担当する。ストーリーには「橋下徹 野心の源流」「ジュゴンを探して」を執筆した。



3/18　気象予報士 合格から 8日

気象予報士試験に合格したぁー。ラッキー。合格率4.8%のやや難関な部類の試験。まぁ、そんなことはどうでもよいとして。このあとだ。俺は気象予報士だぜ！そんな肩書きは意味ないぞ。この先何を目指して進めばいいの。夢って本当手にした瞬間消えるもんだわ。次に目指すは もちろん就職。気象会社に！でも正直何がしたいのかが分からない。気象キャスターがやりたいのか。気象の先生になりたいのか。天気予報がしたいのか。就職顧客を発見したいのか。観測結果をもとに経済の変化を知りたいのか。いろいろと思いつく仕事を挙げてみた。これは全部やってみたいことかな。若手というが、あまり天気と関係ない仕事もあるんだぞ。予報プロジェクトの精度の向上を目指す、えっとっとなんだ

6連勤 休日は研修

1面からつづく

神奈川県横須賀市。自殺した森美菜さん（当時26歳）が働いていた和民「京急久里浜駅前店」はモダンな駅舎から徒歩1本隣でたどりつくにある平日の午前9時に訪れた。台風の夜だったが、2組4人の客がいた。

「本日は午前3時までです」営業時間を聞くと、レジの男性店員が愛想良く答えた。営業は午後5時から午前5時まで。金、土曜日と祝日の前日は午前5時まで。周囲の店が閉まる時間帯に和民は営業を続ける。

始発電車の時間を店員に聞くと、乗る路線と方向を確認し、わざわざ時刻表を持ってきてくれた。注文したフライドポテトはていねいにくっついていた。

「本社での調理研修は3、4時間。厨房きさや焼きそばを作ったり、カツオの刺し身の切り方を教わった程度だった。美菜さんも調理業務に携わったことはないようだったので、非常に大変だったと思う」

毎日新聞が入手した労災認定の決定書によると、美菜さんの同期社員はこう陳述している。美菜さんは配属後、キッチンで刺し身やサラダなどを作る「刺場」と呼ばれる調理業務を原則1人で担当させられていた。

決定書によると、「刺場」は注文から15分以内に料理を提供するルール。美菜さんは分厚いマニュアルを横に置き、調理していたという。

あてがわれた社宅は隣駅とはいえ、店舗から徒歩約40分かかる。美菜さんは午前3時半に仕事が終わっても、始発電車が動く午前5時37分まで店内で待機していた。閉店後、店から美菜さんが住んでいた社宅があったところまで歩いた。山道は暗く引き返したくなった。

「休みが休みであればいいのだけれど…」。美菜さんは祐子さん(58)への電話でつぶやいた。休日にも、ボランティア活動や研修会への参加が求められた。

自殺する前日の08年6月11日。美菜さんは連続6日勤務の後の休日だった。東京都大田区内の本社で午前7時から開かれた早朝研修に参加していた。この日、提出が課せられた「読書感想文」が遺品のパソコンに残っていた。課題図書は、ワタミ創業者の渡辺美樹会長(53)の著書「夢に日付を！」。

渡辺会長はこの本の中で「大学を卒業した私は、会社を設立する資金づくりのために1年間、運送会社でドライバーとして働きました。その一年間はまさに地獄、実際、毎日が二〇時間以上の労働という極めて過酷な状況でした」と記し、2年後に社長になる。

美菜さんはこんな感想をつづっていた。

〈「夢」とは何だったろう？　何が楽しいものだったろうか？　今は、足元しか見えない。遠くを見通せる日は来るのだろうか？　目付を入れれば、見えるようになるのだろうか？〉

痛々しい文面が胸を突いた。美菜さんは美術大学を卒業した。祐子さんは「農業に関心を持っていた娘は信濃屋で3年頑張れば、ワタミの経営する農場で働けると夢を語っていました」と話した。

死に推定時刻は研修翌日の午前1時から2時。死因は墜落死。社宅近くのマンション階段の7階と8階の間に花柄の白い傘が立てかけられていたという。遺書はなかった。

労災認定後も続く係争

長時間労働が原因で死に追いやられるケースは、外食産業に限ったことではない。早朝研修に参加していた。この日、提出が課せられた「読書感想文」が遺品のパソコンに残っていた。課題図書は、ワタミ創業者の渡辺美樹会長(53)の著書「夢に日付を！」。

渡辺会長はこの本の中で「大学を卒業した私は、会社を設立する資金づくりのために1年間、運送会社でドライバーとして働きました。その一年間はまさに地獄、実際、毎日が二〇時間以上の労働という極めて過酷な状況でした」と記し、2年後に社長になる。

美菜さんはこんな感想をつづっていた。

〈「夢」とは何だったろう？　何が楽しいものだったろうか？　今は、足元しか見えない。遠くを見通せる日は来るのだろうか？　目付を入れれば、見えるようになるのだろうか？〉

痛々しい文面が胸を突いた。美菜さんは美術大学を卒業した。祐子さんは「農業に関心を持っていた娘は信濃屋で3年頑張れば、ワタミの経営する農場で働けると夢を語っていました」と話した。

死に推定時刻は研修翌日の午前1時から2時。死因は墜落死。社宅近くのマンション階段の7階と8階の間に花柄の白い傘が立てかけられていたという。遺書はなかった。

東京都品川区のフォーカスシステムズの本社近くで待ち合わせると、遺族の父親(66)は「労災も認定されていた。まさか最高裁まで争うことになるとは思ってもいませんでした」と表情をくもらせた。

男性SEは、東京都内の国立大学に入学したものの、半年でやめ、SEの専門学校に進学した。卒業後の03年4月、第1志望のフォーカスシステムズに入社、社内評価で最高ランクに位置づけられるなど順調だった。だが3年後、慣れない業務への配置転換を機に笑顔が失われたという。

「ある日、息子はいつもと同じように家を出た後、会社には行かず、突然、京都に向かったのです。配置に続き付いているように、父親は話した。今年5月下旬、東京高裁判決をとに再現すると、次のような状況だった。

配置転換から2カ月半後の06年9月15日、男性SEは携帯電話の電源を切って京都市に向かった。鴨川河川敷のベンチで缶ビール500ミリリットル本と720ミリリットルのウイスキーの大半をラッパ飲みし、翌16日午前0時ごろ、急性に疾患の疑いで死亡した―。

判決は、複数の医師の所見から「（業務上のストレスから）うつ病及び解離性遁走

息子が勤務していたフォーカスシステムズ本社前に立つ父親。上面は息子が消えても裁判は続く＝梅村直承撮影

を発症し、その結果過度の飲酒行為及びこれが原因で死亡した」と指摘し、業務との関連性と会社側の責任を認め、4300万円余りの賠償金支払いを命じた。

普段からそんなに飲めるタイプではなかったという。親は自殺同然だと思っている。それというのも「死に前一カ月の時間外労働は一ヶ月時間に達していた。業界関係者によると、SEは入社3年目くらいから責任あるプロジェクトを任されて、納期に追われる。被疑作業は珍しくない。業界内では「デスマーチ（死の行進）」と言い習わされているという。

父親は言う。

「過労は明白でも、息子が戻ってくるわけではないから、と当初は裁判を迷いました。でも、息子の死を無駄にしたくない。勝訴して判例を残したい。今は息子と一緒に闘っているような気がします」

日本労働弁護団事務局長の佐々木亮弁護士は「労災認定を受けても和解せず争ってくる会社は少なくない。安全配慮義務は尽くしていたとか、従業員にも落ち度があったなどと主張して、賠償額を減らすことができるからだ。しかし、争いが長引くと遺族の重荷になりかねない。遺族の負担軽減策が必要だ」と話した。

息子の七回忌は終わったが、裁判は続く。男性SEの死をどう受け止めているのか。フォーカスシステムズ総務部は「本件に関しましては、現在係争中であるため、ご質問に対する回答、その他コメントは控えさせていただきます」とそっけなかった。

入社半年「予選落ち」重圧

「『過労自殺』で弟を亡くした遺族として、伝えたいことがあります。普段から過労問題に対する意識を少しでも持つこと。声を上げることで、救い出してくれる友人や家族、さまざまな機関があることを絶対に忘れないでほしい」

民間気象会社、ウェザーニューズ（以下ウェザー社）に入社した気象予報士の弟（当時25歳）を自殺で亡くした祐(34)のメッセージが関西で読み上げられた。7月28日に東京都内で開かれた「ブラック企業大賞」授賞式でのことだった。

奥行委員の水島宏明・法政大学教授は「『過労自殺』とは、過労が自殺の原因になるということを知ってもらうために市民、労働者側から出てきた言葉です」と話した。精神障害による労災（未遂含む）の労災申請が20代で倍増（1面参照）したことについて「学生にとって厳しい就活状況が続いている。企業側がそれにつけ込み、若者を使い捨てることで競争に勝ち残ろうとしている。若者は即戦力になることを要求され、プレッシャーから精神を病み、自殺に至ってしまう。時代の病理だ」と指摘した。

文部科学省の学校基本調査によると、今春の大学卒業者約56万人のうち、ほぼ4人に1人にあたる2万8000人余り（約23%）が正社員なら安定した仕事には就いていなかった。就けないのだ。大手チェーンストアの男性社員(28)に話を聞くと「大学卒業後、正社員にたれず、派遣社員とアルバイトで3年。2年前に就職できたものの配属された店舗は24時間営業でした。高校生の アルバイトが休むと夜中でも呼び出されるから、安心して眠れない。すでに数人の同期が、うつ病などで休職中ですが、やっとなれた正社員だから辞められない」と苦しそうだった。なりたくてもなれない。そして、正社員になったらなったで辞められない。若者を取り巻く労働環境が垣間見えた。

気象予報士の兄を京都市内に訪ねた。弟は子どものころから気象に興味を持っていた。有名私大工学部を卒業、メーカーに就職したものの、あきらめきれずに07年に気象予報士を受験、合格した。日記が残っている。〈気象予報士試験に合格したぁー。ラッキー。〉

文面からはじけるような喜びが伝わってくる。弟は翌春、念願の業界最大手、ウェザー社に入社した。

「大きな希望を持って入社しました。でも、携帯メールにも返信がなくなり、家族が心配している、と書いて、何とか返事をもらいました」。弟からのメールにはこうあった。

〈毎日2時ときまわるから電話できひんねん。もし心配してたら大丈夫やと言うとって。〉

弟はテレビなどで読まれる気象予報のライターとして早朝から深夜まで続く切りに追われていた。兄が弟のパソコンなどの記録から算出した時間外労働は、入社2カ月後の6月に216時間15分、翌7月には232時間54分に達していた。

ウェザー社によると、社員の「相互評価期間」（6カ月）は会社と社員の試用期間として設けられ、同期入社30～40人のうち、上司から弟に知らされた「契約職」に変更される。「この制度は『予選』と呼ばれ、弟の大きなプレッシャーになっていたと、兄は思っている。そこへ上司からの心ない言葉が加わった。

「何のために生きているのか！なんでこの会社に来たのか。迷い込んできたのか」。上司から弟に宛てた電子メールだ。ほどなく弟は京都の実家に日帰りで帰ってきた。

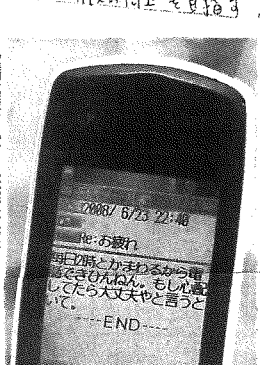
「弟は『こんなメールが来た』と心配していましたが、家族と食事をして表情が少し明るくなったように見えました。何度も辞めて帰ってきたら、と促したのですが、本人は『とにかく10月までやってみる』と繰り返した。『予選』の結果を見て判断したかったのでしょう」

新幹線の改札口を抜けて、千葉県の職場に戻っていく弟の背中が兄にはいつもより心小さく見えた。胸騒ぎがした兄は何度も弟の携帯に電話してみたが、車中の弟には通じなかった。これが最後になった。

兄によると、08年10月一日、弟は上司から「予選通過は難しい」と告げられ、翌2日に自宅アパートで練炭自殺した。千葉労働基準監督署は10年6月に労災を認定。これを受けて同年10月に遺族は賠償などを求めて京都地裁に提訴。同社は即座に和解の意向を示し、12月には要求通りに謝罪、賠償、再発防止を約束した。

この和解について、戸村孝ウェザーニュース副社長は「遺族から提訴され、われわれの会社は責れてしまうぞ、と社内がパニックになった。悪評が広がって事業継続が難しくなるということで、早期解決を狙った和解だったのです」と話す。

和解後、ウェザー社内に結成された労働組合からの職場改善要求については「資本と労働の関係で、業務命令は全部出せるのです。それに従わなければ解雇とか、処遇を悪くするとか権限を持っていて、会社と社員（社）対等な契約関係にない存在なんですよ」と言う。対等でない……。厳い主側の本音が見えた気がした。



母親は突堤して「もちろん就職。気象会社に！」と自記につった。翌春夢を実現したはずだった

母親は自殺したウェザーニュース男性社員が兄に送った携帯メール

過労死、過労自殺を防ごうと「全国過労死を考える家族の会」「過労死弁護団全国連絡会議」などは昨年11月、「過労死防止基本法」の制定を求める100万人署名運動を始めた。現在まで30万人の署名が集まり、支援の輪が広がっている。